2023年1月1日　アクセス　（1976年11月10日第三種郵便物認可）　第552号

地方小出版 情報誌 アクセス

毎月1回　1日発行
購読料　定価150円
（本体136円）
年間1,500円（税込み）
振替　00120-0-19017

発行所　㈱地方・小出版流通センター
編集　アクセス編集委員会
〒162-0836　東京都新宿区南町20
TEL.03-3260-0355　FAX.03-3235-6182

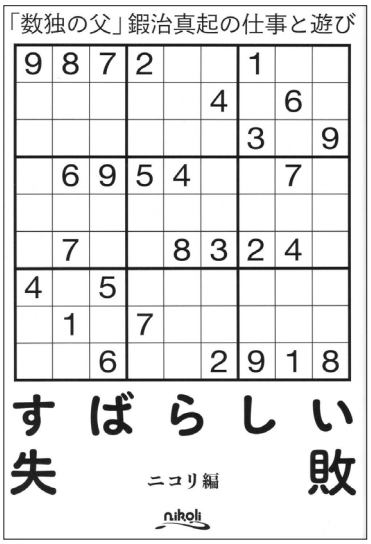
「すばらしい失敗」とニコリの現在

鍛治さんの理念「ニコリのパズルを世界に広める」に共感し、後継者として考え取り組んできたこと。

文・安福　良直（ニコリ代表）

2022年10月、ニコリから『すばらしい失敗 「数独の父」鍛治真起の仕事と遊び』を刊行した。これは、我々ニコリを創業し、ずっと代表を務めてきた鍛治真起さん（本稿では敢えて「さん」付けとする）の評伝である。

鍛治さんは1951年に札幌で生まれ、1980年に日本初のパズル雑誌『パズル通信ニコリ』を樹村めい子さん・清水眞理さんとともに創刊し、その後同じメンバーで株式会社ニコリを設立し、自ら名付けたパズル「数独」が2000年代中ごろに世界的大ヒットを果たす。2021年7月末にニコリ代表の座を退き、その10日後に癌でこの世を去った。その人生を、約30人の証言を元に描いたのが本書である。創業間もないころに、地方・小出版流通センターを訪れて取引を始める話も入っている。



『すばらしい失敗　「数独の父」鍛治真起の仕事と遊び』発行・編集ニコリ／四六判・本体価格1800円・ISBN978-4-89072-379-9

自由奔放に生き、多くの人から愛された鍛治さん

こう書くと、すごく成功した人物の一代記のように思われるかもしれないが、実際は、金銭的に大きく儲けたわけでもなく、マスコミに大きく取り上げられても出しゃばらず、酒とたばことギャンブルを愛し、世界中の誰とでも仲良くなれた。パズルという、日本では未開だったジャンルの会社を立ち上げたが、経営のパイオニアというイメージは薄く、それどころか出社すること自体が珍しくなっていくというありさま。とにかく自由奔放に生き、多くの人から愛された。ひょっとすると、功成り名遂げた歴史上の偉人よりも、今を生きる人々から憧れられる人生を送ったのかもしれない。

本書を刊行しようと考えたのは、鍛治さんが亡くなった後の2021年の冬。この人生を後世に伝えたいと思ったのはもちろんだが、実を言うと、亡くなる前の鍛治さんとは週に1～2日しか会わない状態になっていたので、普段はどこで誰と会って何をしていたのか、もっと知りたいなという思いもあったのも正直なところ。我ながら情けない話であるが。ということで、執筆を依頼したライターさんの取材にできるだけ同行し、そこでいろいろな話を伺うことができたが、中には初めて聞いたことも多く、特に鍛治さんが若いころの話はとにかく新鮮だった。

強く印象に残るのは、「鍛治さんは記憶の天才だった」という話。いわゆる暗記の能力がすごいということではなく、目に映った景色を覚えて、それを再現する能力。何年も前に訪れた場所のことをよく覚えていたり、それを絵に描いて説明するのも上手だった。その能力が、物事の本質を一瞬で見抜くことにつながったり、パズルの面白さを短い文章で表現することにつながったのではないかと思う。

それでも、本書の取材を通してわかったことは、鍛治さんの人生の半分くらいでしかないのかな、という思いもある。まだまだわからないことだらけで、本ができた後になっても、鍛治さんによく会っていたという方が現れたこともある。これから本書を手にしていただく方には、ここに書かれていない鍛治さんのことを想像しながら読んでいただけると幸いである。

押しかけ入社し、その後、編集・経営に携わる

『パズル通信ニコリ』には、読者からたくさんのハガキや投稿作品が集まるようになり、鍛治さんたち編集部と読者の距離が近い雑誌として発展していった。私もかつてはその読者の1人で、パズルをたくさん作って投稿するようになり、ついには押しかけ入社したのだが、そのときに鍛治さんに猛反対される様子も本書には描かれている。

私は入社後は本の編集に携わり、やがて『パズル通信ニコリ』の編集長を任され、数独ブームのときは数独本のメーン編集者でもあった。数独を命名した鍛治さんは、"Godfather of Sudoku"（数独の父）ともてはやされ、世界中で引っ張りだこになるが、そのころ私はずっと国内にいて本を作っていたことになる。当時は、このままずっ

とパズル本を作り続けていたいなあという気持ちが強かったが、数独ブームがひと段落すると、だんだん本が売れなくなっていき、会社の業績も下がっていった。

ニコリには出版の他に、パズルを制作して他の新聞や雑誌に提供する事業があり、こちらは順調に稼いでいたが、数独ブーム後は売上が横ばいになっていった。

そうして2010年代の中ごろ、私はニコリの役員になり、さらに数年後に、鍛治さんから後継指名される。この、後継指名のくだりは、本書にもあるが、実は私はハッキリと覚えていない。いつどこで指名されたかも定かではなく、気がついたら「次は安福ね」ということになっていて、鍛治さんは社外の友人にも言いふらしていたようである。なぜ私になったのか、ということもハッキリせず、他にも「次の社長」になりたい社員はいたはずだが、ある席で、ニコリの将来について私が前向きなことを言って、それを聞いた鍛治さんが「次は安福だ」と確信したらしい。せめて、私自身がその発言について覚えていればよかったのだが…。

なお、鍛治さんが社外で次の社長について言いふらしていたことも、私はよく知らなかったのだが、鍛治さんが亡くなってから社外の人に会うたびに、「あなたが安福さんですか。鍛治さんから聞いていましたよ」と言われ、その後の話もスムーズに進むことが多くて、とてもありがたかった。

パズル観の変化と経営理念

さて、私が後継指名されるのと同じくらいの時期に、私のパズル観が変わるような出来事もあった。東日本大震災で被災した岩手県大槌町で数独を教える機会があったが、当時の初級者向け単行本の数独は難しすぎて役に立たず、改めて誰にでも解けそうな、ものすごくやさしい数独を持っていったら喜んでいただけた。それまでは、自分たちが面白いと思うパズルを提供し、その面白さに共感できる人を増やしていけばいいと考えていたが、この経験から、どんな人でもパズルを楽しむことができて、その人に合ったパズルをどう提供するかを考えるべきだと感じた。

鍛治さんも震災の被災地に何度も足を運んでニコリのパズル本を提供したり、その前の数独ブームのときは、世界各地を訪れてパズルを教えたりしていた。すると目の前で、初めてパズルにチャレンジする人が、言葉の壁もラクラク越えてドンドン解いていくのだ。その様子に感心し、鍛治さんもニコリのパズルをもっと広めたいという思いに駆られていったに違いない。それで、鍛治さんは会社の経営理念に、「ニコリのパズルを世界に広める」という言葉を掲げた。ちなみに鍛治さんが掲げた経営理念には、他にも「遊び尽くす。学び尽くす」という言葉もある。

こうして私は自分の経験から、鍛治さんの理念「ニコリのパズルを世界に広める」に共感するようになり、この頃から私は社外の人と会ったり、セミナーを聴きに行ったりするようになる。それまで編集の現場にずっといたので、経営のことは初心者同然。ならば外に出て学びに行くしかなかったのだ。

そんな中、後継者向けの経営セミナーに行くようになり、そこで自社の歴史を調べよという課題を出され、会社の過去の決算書に目を通したりした。するといろいろなことが見えてくるもので、改めて気になったのが、やはり数独ブーム後の業績の下落ぶりだった。当時は、業績が悪いと言われても、生み出しているパズルは引き続き高く評価されていたので、そんなにひどいと思っていなかったのだが、創業からの全体の推移として眺めたとき、数独ブームで業績が上がった後にダラダラ落ちていくというのは、未来がなくなる会社の典型ではないか、と思ってしまったのだ。

「この会社を、私は『継ぎます』と本当に言ったのか？」とも思ったが、その一方で、セミナーで会社を客観的に見ることを学んだことで、悪くなった原因なども見えてきたし、それにやはり、パズルとニコリによって今までの人生があることに感謝の念も抱いていたので、なんとかするしかないな、という思いも生まれた。

そしてセミナーを修了した直後の2020年の秋、鍛治さんの病気が発覚する。そのときまで、社長交代の時期は決まっていなかったが、ここでそれが、次の期末にあたる翌2021年7月末となった。結果として、鍛治さんはその期末から10日後に亡くなることになる。

経営課題への取り組み

ここからは、会社の業績を持ち直させることと、銀行の融資に関する問題を解決することが重要課題になった。後者については詳しくは書けないが、借金のある会社は、業績が順調だったとしても、社長にもしものことがあれば存亡の危機を迎える。それが現実の問題として目の前に現れたから本当に怖い思いをしたが、２年ほど前から業績が少し持ち直していたことと、銀行さんのご理解などがあり、返済できたわけではないけど、解決と言える状態にはできた。そのことを鍛治さんに報告したときは、もう外出もままならない体調になっていたが、安心していただけたのではないかと思う。

会社の業績については、課題はまず営業にあると見ていた。商品力の方は問題ないけど、出版、新聞等への提供のどちらの部門も満足に営業をかけていなかったと判断し、採用を進めて人員を増やした。ニコリは出版はずっと直接取引でやってきたが、これはある程度人数をかけてやっていく必要がある。ここ２年で出版営業を２人増やし、売り上げも少しずつ戻してきている。

新聞へのパズル提供業も営業の人を増やしたことで、こちらはウェブサイトなどデジタルでの需要もつかめるようになってきた。

鍛治さんが亡くなってから１年あまり。まだまったく油断はできないが、業績の方は少しずつ持ち直している。今思えば、後継者としての私は、本当にギリギリのタイミングで間に合ったのかな、と思う。

鍛治さんは、病気が発覚してからしばらくの間、最後の海外展開への夢を実現させようと模索していた。亡くなる直前まで、「数独のカジマキで終わりたくない。パズルビジネスを創った人物として終わりたい」とおっしゃっていた。それは、未完のままで終わった、とはまだ言えないと思っている。

＊

（あんぷく よしなお／ニコリ代表）

新刊ダイジェスト

表示されている値段は本体価格となっております。ご購入には別途、消費税がかかります。

『連赤に問う』●上毛新聞社編

日本中を震撼させた連合赤軍事件からもう半世紀になる。半世紀という時間は長く、事件は風化し、連合赤軍という名すら知らない人たちも多いことだろう。連合赤軍は全共闘運動が行き詰りつつあった1971年12月、先鋭化した共産主義者同盟赤軍派と日本共産党革命左派神奈川県委員会が、群馬県榛名山のアジトで組織合同して結成されたものだ。そのアジトで構成員12人を集団リンチの末に殺害し、凍り付いた山中に埋める凄惨な事件が起きた。それより前、革命左派は同志2名を殺害している。翌2月、最高幹部は妙義山で逮捕され、逃れた残党は長野県軽井沢の山荘に管理人の妻を人質に取って籠城した。人質は無事解放され、構成員全員が逮捕されて連合赤軍は壊滅するが、機動隊員2名と民間人1名が犠牲になった。それだけでは終わらず。5年後、赤軍派の海外組である日本赤軍がダッカ日航機ハイジャック事件を起こし、元構成員らの釈放を要求した。本書は地元群馬県の『上毛新聞』が、この事件を戦後史のどこに位置づけるべきか、どう捉えたらよいのかとの問題意識を出発点に、元構成員、構成員と関りのあった学生運動家、事件を裁いた判事と弁護士、警察官、山狩りに参加した土地の人々や発掘された遺体を仮安置した寺の住職、ハイジャック犯の要求受入れの決断をした首相遺族など同時代の関係者、また、文学者、心理学者、宗教家、環境問題に関心を持つ群馬県内の高校生らに取材し、2021年11月から22年5月まで多角的な視点で連載した記事を基にしたものである。取材・執筆・撮影に当たった10人の記者・カメラマンは、いずれも事件後世代である。下部構成員5人を審理した前橋地裁裁判長の水野正男は、イデオロギーと暴力を当然とする人間性の解体の関係について思索し続け、出所後の構成員とも交流して、「自覚の抑圧を失ってその肉体的本能のみが、主導する自己実現として犯罪を犯し、人を殺すのである」との結論に至る。心理学者の河合隼雄は、そうした状況が生まれたのは、当時の日本社会に、母親が子が膝元から勝手に離れることを許さない、いわば「母性の原理」が強く働いていたためと分析する。一方、刑務所の独房で元幹部の死刑囚と隣り合わせた作家の佐藤優は、ハイジャック事件での釈放を拒否して獄中生活を送る元幹部の人間性を伝えるとともに、新左翼運動の時代背景と、路線の違う組織合流が破局への導線になったことを述べる。ジャーナリストの大谷昭宏は、連合赤軍が方法論を取り違えて間違った結果を生み、市民社会で育つはずの社会変革を求める芽を摘んでしまったと厳しく批判し、その後に起きたオウム真理教とロシアの強権化に触れ、メディアが真実をしっかりと伝えず、彼らを忘れたら、風化して愚かな風評が入り込み、また同じ過ちが起きるかもしれない、「ただし、社会を変革させることは禁忌ではない」と結ぶ。これが本書の意義である。（飯澤文夫）

◆1500円・四六判・192頁・**上毛新聞社**・群馬・202209刊・ISBN9784863523173

『俳句は国境を越えて ー One-Poem One-World』●西川盛雄著

日本人にとって身近な詩型である俳句は、今や国境を越えてHAIKUとして世界中に拡がり、地球規模で人々を惹きつけて止まないものになっている。英語学や言語学を専門とし、大学で留学生に俳句を教えることもあるという著者は国際俳句交流協会の会員でもあり、日々俳句とHAIKUに接している。本書では、そんな俳句とHAIKUの狭間にあって感じ考えられたことが様々な視点から語られている。例えば、海外のHAIKU作品を見る時、それぞれの地域における文化、歴史、風土からくる独特な季節感がすぐに目に止まる。それぞれの国にはそれぞれの歳時記があるのである。そして北欧のオーロラや白夜も、砂漠の乾燥も広大なサヴァンナもHAIKUの素材としてふさわしいものとなる。また自然現象ばかりではなくハロウィンやイースター、聖人の日など季節の節目となる祭祀や儀式も重要な西洋の歳時記の一コマである。さらに、外国語のHAIKUにおいては「人情」つまり私情をテーマとする傾向があり、対して日本の俳句は、私情が抑制され自然に託した写生あるいは、漱石が『草枕』で言ったところの「非人情」をテーマとしてきたとも指摘されている。そして随所で西洋の俳句受容の歴史について言及されているのも興味深い。欧米人としてはじめて日本の俳句の魅力を広く西洋に紹介したのは、ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）であった。またかつて日本の浮世絵がモネやドガなどフランス印象派の画家たちに大きな影響を与えたのと軌を一にするように、文芸の分野においては二十世紀初頭、イマジストと称される新傾向の詩人たちに、この一筆書きのような短詩が大きな衝撃を与えた。西洋の伝統としてあった説明的な長い物語風の詩に対して、「写生」と称して一瞬のイメージの鮮烈さを詩の源泉とする俳句に彼らは大いに驚き、俳句的短詩の創造的試みがなされた。さらには第二次大戦後のアメリカのビート派詩人たちも忘れることができない。日本の伝統である俳句が、西洋の伝統的な詩文の世界へのカウンターカルチャーとなるような様相を呈したのである。他にも、アメリカの著名な黒人作家リチャード・ライトやドイツ人宣教師W・グンデルト、アメリカ俳句の父と言われるハロルド・C・ブランデンなどの名前が上がっている。本書第二章では、熊本時代の夏目漱石が残した多くの句の英語訳が試みられている。よく知られた〈菫程小さき人に生れたし〉は、〈I wish to get begotten / like a man as small as / a violet〉といった具合になる。漱石句の愛好家には見逃せないところである。第三章は「時の記憶」と題され、著者自身の俳句作品とその英語訳が併記されている。〈セーターに着替えて妻の退院す〉（my wife / changing into a sweater / is to leave the hospital）など全32句。（T）

◆2100円・A5判・234頁・**弦書房**・福岡・202211刊・ISBN9784863292604

『カレル・チャペックの見たイギリス』●カレル・チャペック著 / 栗栖茜訳 / 村上春樹解説

“イギリスは二つの矛盾する論理が共存できる二律背反の国なのです。恐るべき近代産業を発展させるとともに、昔からずっと続いてきたもともとの牧歌的生活も失うことなく保ったのです”。イギリスという国をこんな風に表現するカレル・チャペック。第一次世界大戦と第二次世界大戦の間の約20年、問題作を次々に発表し、精力的に活動したチェコの作家で、戯曲「ロボット」は世界各国で上演され、一躍有名になったが、イギリスはその中でもチェコ以外で上演した最初の国だった。そんな縁もあってか、1924年にロンドンで開かれた国際ペンクラブの大会に招かれ、同時期に開催されていた世界博覧会の取材も兼ねて約2か月間イギリスに滞在したチャペック。イングランドからスコットランド、ウェールズを巡り、本書はその旅行記であるが、単なる観光旅行ではなく、冒頭に示したようにイギリスという社会を見る旅をしている。

イギリスの料理を酷評したり、イギリス人は沈黙を重要視するなど、ややシニカルな眼差しを向けつつ、スコットランドでは羊、馬、牛の群れのスケッチに没頭。建造物や人物、自然も含めた全編にわたるチャペック自らのスケッチも味わい深い。解説は村上春樹。彼自身、数多くの紀行文を出しているが、チャペックと同じ視点が感じられ、「とくになんでもない」些細な物事に温かい目を向けるのがチャペック持ち味としている。独創性と普遍性があるイギリスが好きなチャペックの独自のイギリス論が展開されている。（Y）

◆2000円・四六判・219頁・**海山社**・東京・202210刊・ISBN9784904153130

『水と生きる地域の力　琵琶湖・太湖の比較から』●楊平・嘉田由紀子著

1972年発行の『成長の限界』は、世界の人口の増大し、世界の経済が成長し続けると、環境にどのように影響をもたらすかを追求した。現在では高度経済成長後、人間が石油や核等の生産不可能な資源に依存する工業化や産業化によって、環境も景観も大きく変化。昭和30年代まで、琵琶湖辺の水田農業は、化学肥料や近代農業を使わず、湖・河川・森林から栄養分を取り入れた、自然循環型の農業であり、水に生きる地域の力があったという。

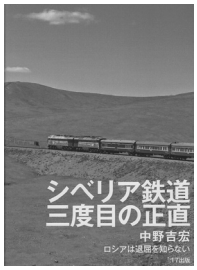
このような観点から日本一の湖琵琶湖と中国五大湖の一つ太湖に関する水の生活・生業・地域コミュニティの変化を追求する。「第一部 水と生活－関わりの多様性」では〈水辺遊びの意味と環境適応〉〈守りを貫く地域コミュニティ「生水の郷委員会」の挑戦〉、「第二部 水と生業－水陸移行帯における多重性」では〈コモンズ環境としての水辺〉〈農業にみる水とのせめぎ合い〉、「第三部 社会基盤を支える地域コミュニティ」では〈若者を育てる地域の力〉〈生活を支える基礎的な組織〉、「第四部 東アジアの中の魚米の郷－琵琶湖から太湖へ」では〈水と生業・資源の循環からみる生業複合〉〈地球規模での気候危機にコミュニティ主義は有効か？〉といった項目を掲げ論ずる。

琵琶湖と太湖は、地球規模での環境破壊と気候変動危機問題について、地域コミュニティで重ねてきた地域再生力、即ちレジリエンスの力を強化することが必要だと強調する。

（古賀邦雄　古賀河川図書館）

◆2800円・A５判・262頁・**サンライズ出版**・滋賀・202211刊・ISBN9784883257775

『シベリア鉄道　三度目の正直』●中野吉宏著



シベリア鉄道の旅行記は色々ありますが、本書の特徴は著者にとってこの2016年のシベリア鉄道旅行は1982年・2000年に次ぐ三度目の旅行であること。そしてもうひとつはかつての二回の旅先で出会った異国の人々との交流を今も深め続けていることです。

というわけで本書に収められたこのシベリア旅行記では、以前の旅と今との違いや、懐かしい人たちとの再会などが中心に描かれています。ウランバートルの寺院では、そこにいた僧に2000年に撮った写真を見せたら、写っている小僧さんがまさにその僧その人なのでした。イルクーツクでは前回訪ねた村を再訪します。当時出会った人たちとの再会はかないませんでしたが、あちこち案内してくれた気のいいドライバーとの新たな出会いがありました。車内でも一等車の個室で酒を呑みまくる（昼までにウオッカ２本？）男に酒盛りに付き合わされたりと様々な出会いがありました。長距離列車の旅で同じ車両に乗り合わせた人たち、そして乗務員の人たちのおおらかな雰囲気が伝わってきます。そして終点の先サンクトペテルブルグでは、ただの観光かと思われたこの旅行のもうひとつの目的が明らかにされます。それも2000年の旅での出会いがもたらしたものでした。それが何かは本書の手に取ってのお楽しみです。今はウクライナとの戦争に明け暮れるロシアですが、この本の中に出てくるような気のいい人たちの国でもあるということも感じてもらえればと思います。（副隊長）

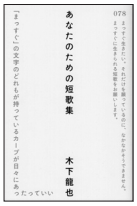
◆2000円・A５判・191頁・**１７出版**・兵庫・202212刊・ISBN9784990064570

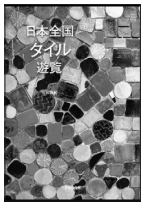
売行良好書

期間：2022年11月15日～12月14日
※価格は本体価格表示です。別途消費税がかかります。

［出荷センター扱い］

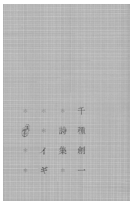
(1)『あなたのための短歌集』1700円・ナナロク社　(2)『日本全国タイル遊覧』1900円・書肆侃侃房　(3)『オールアラウンドユー』1800円・ナナロク社　(4)『カメスケのかわいい水辺の生き物１』1500円・花乱社　(5)『福岡 九州の災害地名』2000円・忘羊社　(6)『小さきものの近代１』3000円・弦書房　(7)『海亀のテント』1800円・書肆侃侃房　(8)『愛ことば』1200円・岩手日報社　(9)『アールヌーヴォー建築　建築家の自邸ＢＥＳＴ５０』1000円・リーブル出版　(10)『戦国山形の合戦と城』1900円・無明舎出版　(11)『連赤に問う』1500円・上毛新聞社　(12)『お砂糖とスパイスと爆発的な何か』1500円・書肆侃侃房　(13)『沖縄の身近な植物図鑑』4500円・ボーダーインク





［ジュンク堂書店池袋店　地方出版社の本―センター扱い図書］

(1)『イギ』1800円・青磁社　(2)『茨城県北ジオブック』1000円・茨城新聞社　(3)『振り返れば未来　山下惣一聞き書き』2000円・不知火書房　(4)『連赤に問う』1500円・上毛新聞社　(5)『毛鉤釣手帖　第１号』2273円・黒石商店　(6)『日本全国タイル遊覧』1900円・書肆侃侃房　(7)『千夜曳漠』1800円・青磁社　(8)『左川ちか全集』2800円・書肆侃侃房　(9)『希望の一滴』1500円・西日本新聞社 (10)『月面文字翻刻一例』1700円・書肆侃侃房　(11)『愛と絶望のコリア記』1900円・海鳥社　(12)『中国中世の服飾』3800円・中国書店　(13)『沖縄空手「型」を探る』1600円・沖縄タイムス社　(14)『道の駅の経営学』2400円・大阪公立大学出版会　(15)『ジソウのお仕事　データ改訂版』1800円・フェミックス　(16)『若狭中世城郭図面集１　若狭東部編（美浜町・若狭町）』3000円・桂書房　(17)『出雲と吉備』1500円・ハーベスト出版



以下ホームページ等でも各種情報提供を行なっております。ご利用ください。
ＵＲＬ：http://neil.chips.jp/chihosho/　　ツイッター公式アカウント：@local_small

トピックス ―― ★★★

▼渋谷の丸善ジュンク堂書店渋谷店が2023年1月末で閉店となります。入居している東急百貨店本店の営業終了によるものです。閉店まで、謝恩キャンペーンや各種フェアも実施する予定とのことです。2023年2月以降の代替店舗での営業も検討中とのことですが、具体的な進展はないようです。2010年に開店以来、弊社とは直接取引で取引各出版社の刊行物を納入していました。続いて、1978年に東京駅前に開業し、100万冊の在庫を有する日本初の超巨大書店として知られた八重洲ブックセンター本店が、2023年3月末で閉店となります。所在地を含む街区の再開発計画に伴うものです。閉店後、代替店舗での営業を検討中のことですが、こちらも具体的な進展はないようです。2028年に同エリアに竣工予定の超高層大規模複合ビルへの出店を計画しているとのことです。こちらは弊社とは直接取引はしていませんでしたが、4階の地方出版コーナーなどでは、取扱書籍をたくさん売っていただきました。この5月に建替え閉店となった三省堂書店神保町本店とともに、やむを得ない事情とは言え、大型店の閉店が同じ年度に重なります。

▼優れた出版活動を継続して展開している中小出版社の出版活動そのものを顕彰するという主旨で、１９８４(昭和59)年に創設された**梓会出版文化賞**ですが、2022年、第38回では**書肆侃侃房**（しょしかんかんぼう、福岡県）が選ばれました。以下の通り、受賞理由が公表されています。「書肆侃侃房は従業員８人、２００２年設立、今年で創立20周年を迎えた出版社。『左川ちか全集』は、10代でヴァージニア・ウルフなどの翻訳を残し、詩人として活躍した左川ちかの全貌を年譜、解題、解説などで知ることができる全集。また、16年からは「韓国女性文学シリーズ」、19年から「韓国文学の源流シリーズ」など韓国文学にも早くから注目していた点なども評価され、満場一致で決まった。」

地方・小出版物のデータになります。綴じて保存してください。

honto
ネット通販で地方・小出版流通センター扱い
本がご購入いただけます。
honto.jp
hontoではお客様の読書スタイルにあわせて
電子書籍でも紙の本でもご購入でき、hontoポイントは
ネットでも書店でも使えて、貯められます。
地方・小出版流通センター扱いのご当地本もネットで
ご購入いただけます。
くわしくは honto.jp へアクセスください。